
この月の向こう

saku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この月の向こう

【Nコード】

N1419D

【作者名】

saku

【あらすじ】

巨大な組織の中で居場所の無い少年と巨大な大国の中で居場所の無い少女。そんな二人が出会い、物語は始まる。

白刃が煌く。

その後に迸る血飛沫。

慣れた手つきで剣についた血を布で拭う少年は若くして血の臭いを漂わせていた。

■ ■ ■

北東の国フェーノス。

豊かな国として知られ、大国有数の国軍事大国。

その城の門前に一人の少年が立っていた。

端正な顔つき。髪と瞳はまるで燃えているように赤い。

しかし、それにも増して印象的だったのは背中に背負った身長よりも大きな大剣であった。

「おいっ、もう閉門の時間だ。早く帰んな坊主。そのお飾りの剣売ればどこかの宿には泊まれるじゃないか。」

ニヤニヤと門番が笑う。

しかし、そのニヤけきった顔は一瞬にして青色に染まった。

「お…お前。」

門番の眼前には剣の切っ先が突きつけられていたのだ。

「飾りかどうかお前の身体で確かめてやろうか？」

門番はピクリと動いた後にヘナヘナと腰を抜かした。
ドゴッ

少年がその延髄に鞘を叩き込むと糸の切れた操り人形のように門番は前のめりに倒れていく。

軍事大国といっても門番がこの程度ならことが知れてるな…

そう呟き、少年はそのまま門を潜っていった。

□□□

カンカンカンッ

「敵襲」を告げる警鐘が打ち鳴らされた。

敵影はわずかに一つ。

しかし、群がる兵士たちは次々と蹴散らされていった。

その光景を指令官室から眺めていた兵士長は色を失う。

正直、敵が一人と聞いたとき確実に勝てるというよりも間違いが来
たと思った。

たまにそんなのがいるんだよな…と欠伸交じりに何人かの兵士につ
まみ出せと命じた。

多くの軍事大国と互角に渡り合えるこの国の軍事力からすれば当た
り前の反応とも言えよう。

だが、戦況はどうだ。

蹴散らされたのは日々厳しい訓練を受けているはずの兵士たちの方
…。

今迄にない事態…。

「だ…第一陣はどうした？」

「もう壊滅状態です…。」

「えーい、一人に壊滅されたとあつてはわが国の恥曝しだ。もう全
部隊を向かわせろ！」

「は…はいつ。」

□□□

大勢の兵士が群がる中心に少年はいた。

兵士たちの剣戟を紙一重でかわし一太刀で仕留める。

戦いは完全に剣によるもので相手は飛び道具を使ってこない。

というよりも使えないと言った方が正しかった。

これ程までに多勢に無勢であると、敵を仕留めることよりも同士討

ちの危険性が高くなるからだ。

しかし、兵士達は舞うように剣を振るう少年の動きを捉え切れなかった。

「待てゝい。」

図太い声が響き、兵士達が動きを止める。

「へ…平太夫さん。」

「おう。こいつは俺に任せな。」

現れたのは6尺30貫はあろうかという大男。

「おうおうおう。わいは3番小隊長、小巻紙平太夫。いざ尋常に、あゝ尋常に…」

グアパツ…。」

「うるせえ。」

斬りつけるとあっさりと倒れる巨漢。

な…なんだこいつ。

「へ…平太夫さゝゝん。」

「う…うう。可愛い部下たちよ。後は頼…んだ…ぞ。…ガクツ。」

わざとらしく倒れこむ巨漢。

あきらか演技だろ…それ。

『ガクツ』って自分で言っちゃってるし…。

つか、シリアスな雰囲気無し…。

と思つてシラケル少年。

しかし…

「…よくも平太夫さんをー。」

部下達は奮起したようだ。

「…うおおー」となだれ込んでくる兵士。

だが、少年は冷静だった。

つまんねーな。

今回の仕事は軍事大国つてことで期待してたんだけど…たいした使い手もいやしねえ。
早く終わらせるか。

少年は剣を両手で顔の前に掲げ、呪文のようなものを詠唱し始めた。すると剣に炎が巻きつく。それはまるで炎龍。その猛々しさ、威圧感はそのから放たれる技の威力を物語っているかのようだ。

「悪いな…終わりだ。」

少年が剣を振ると、その炎が辺りを焼き尽くした。

そして、そこには何かが焼き焦げた臭いだけが残った。

□
□
□

戦乱後の静寂。そんな中、城門いや今やその原形は残していないが…から一つの人影。

褐色に変わったマント、血の匂いを漂わせたその少年は慣れた手付きで剣に付いた血を拭う。

「終わったのか？」

上から声が聞こえた。

少年が見上げると瓦礫と化した門の上に黒いマントを着込んだ男が腰を下ろしていた。

「…」

「殺ったようだな。それでいい。」

男は軽やかに瓦礫から飛び降りる。

そして、少年に黒色の紙を握らせた。

「次はこの任務だ。」

そう言つて男は、トントンとその紙に書かれた文字を示す。

「じゃあ、もう俺は行くぞ。」

そう言つてマントを翻す男。

短く呪文を詠唱し、ゲートを創造する。

「エルドさん。殺す必要があったのでしょうか？」

「何を創るにも犠牲は付き物さ。」

「でも…」

言い返そうとした少年の前にもう男はいない。

ただ残るは手の中にある黒い紙に書かれた朱色の文字のみ。

『セツツバル国皇女ルナ・バリアンテ・エルナンデス』

少女がいた。

セツバル王国皇女として大陸中にその名を轟かすその少女は名をルナといった。

「ルナ様。今宵フェーノスからの使者が来るそうです。」

「そう。それなら和平交渉が成立したのね。」

「そのようで。」

老父が笑う。その笑みには心底嬉しさが溢れていた。

それもそのはず、交渉が成立したことで得られるものは国内に暮らす民にとって非常に有意義なことである。

まして、目の前の少女のその笑顔が老父の頬の筋肉を緩ませていた。

「とても嬉しそうな顔をしていますね？」

「ええ。ルナ様が嬉しそうですから。」

「それはそうですよ。民の平和が叶うのですから。」

「こんなに皇女様に思われてセツバルの民は幸せですね。それでは、正装に着替えて来てください。」

「はい。」

そう言つて少女は奥のほうに入つていった。

そんな少女を見ながら老父は思う。

この子はこの国の唯一の希望だと…。

■ ■ ■

4人の男がセツバルの正門を潜った。

途端に沸きあがる歓声。

見ると、正門から赤の絨毯が続き、その左右には多くの人ばかりが

並んでいた。

人々はバラシア王国の国旗を振りかざし、国歌を歌う。
これはこの国における最大級の歓迎。これだけで民がどれほど平和を待ち望んでいたかが窺える。

城門を抜けると、大広間に通された。

相変わらずの歓迎ムードで床には赤い絨毯。左右にも同じ様に人が並んでいる。

唯一つ変わったのは、観衆が剣を持った厳つい兵士に代わったことだった。

「遠いところから来られてお疲れになったでしょう？」

見上げるとそこには綺麗な顔。

人形のような大きな眼が優しく微笑み、労いの言葉を小さな口からこちらに投げかけている。

その少女は名をルナリア・バリエンテ・エルナンデスといった。

この大国の第一皇女である。

「いいえ、それほどでもございません。」

使者の1人が片膝を付いたままで答える。

「こちらにいらしてくださいな。」

そう言われて使者の少年は立ち上がり前に歩を進めた。

一歩進むごとに燃えているような真紅の髪が揺れる。

歩を止めた少年は懷から旗印を取り出した。

和平の儀式。それは、お互いの旗印を交換することで成立する。

皇女の横には万が一がないように護衛が2人。

その間で、少年は片膝を付き旗印を前に差し出す。

少女がそれを受け取り、旗印がお互いに渡る。

長年戦乱状態にあった両国の和平が今成立しようとしていた。

「これからはいい国交を築きましょう。」

少女の心からの笑顔。

それは平和を望む国民全員の笑顔を代弁しているようであった。
しかし、

「ええ。では、まずあなたの命を頂きます。」

「――！」

和平ムードで和んでいた空気が一瞬して張り詰めたものになる。

そして、少年は少女との距離を一瞬にして潰した。

「なる――！」

護衛が飛び込む。

しかし、その拳を少年は軽くいなす。

交差際に鳩尾に拳打。

すると、大きな男の身体が二つ地に伏した。

「悪いな……。」

少年が少女に剣を突きつける。

「……。」

「……。」

そして、少年は剣を振り下ろす。

ザシュッ

そこには嫌な音だけが木霊した。

あとながき

どうも s a k u です。

読んでくれてありがとうございます。

まだ2話なのに展開早いですかね？汗

自分ではよくわかりません。

ついに少年と少女が出会いました。

でもいきなり斬られます…汗

3話もできるだけ早く更新したいと思います。
ではまた。。

少年は剣を振り下ろした。

鮮血が飛ぶ。

いつも見慣れた景色。

そして、指で十字に空を切る。

「悪いな…。恨んでくれてかまわないから。」

「そうか。では、恨みを晴らさせてもらうぞ。」

「んな!？」

振り返るとそこには先程の少女。

なぜ生きている。

確かな感触が剣に伝わった。

人を斬った時のあの感触。

なのに…目の前には無傷の少女が居る。

「そこまで驚くことも無かろう。これはお主等が日頃使っているものだぞ。」

「何だと!？」

「それが自分たちだけの技だとも思ってたか？勘違いも甚だしいわ。」

腕を組み、フンと鼻を鳴らす少女。

「そうか…。ならばもう一度消えてもらう。」

それに応えるように少年は剣を構え、少女へ向かって疾走した。

「お前たちは手を出すなよ。」

少女が臣下に向かって叫ぶ。

そして、腰の辺りから引つ張り出した杖を構えた。

「うおおおお!!」

剣戟が襲い掛かる。

しかし、少女は一瞬でその間合いの一步外へと身体を滑らせた。
キーン

次の斬戟は相手の杖と交わる。

しかし、その力勝負を制したのは、やはり体格に勝る少年であった。
体重の軽い少女が後ろに弾き飛ばされる。

「もらったあー!!」

好機と観るや否や少年は突きを繰り出す。

ドゴッ

「ぐあ……。」

しかし、地に伏したのは少年の方。突き返された一撃を顎にもらっていた。

「確かに『もらった』のう。カウンターを、な。」

「……。」

「……。」

「うるさい。」

ニヤリと笑う少女に少年が叫ぶ。

「この程度の腕でよう『恨んでくれてかまわないから』などという大言を吐いたもんじゃ。」

「ななな……。俺が本気を出せばお前なんて一撃だ。」

「ならば、一番得意な技を使って来い。その方が早くケリが付くようじゃからのう。」

「にやるー。やってやろうじゃん。」

傍から観るとただの喧嘩にしか見えないこの戦い。

しかし、これは歴史に違う色をもたらす出来事の始まりであった。

少年は剣を掲げる。そして、素早く呪文を詠唱し終わると炎が剣に纏わり付いた。

「悪いが加減はできないぜ。」

そう言つて少年は剣を振るつた。

現れたのは炎龍。その荒々しい炎は少女の身を焼いた。
…かに見えた。

しかし、少女にその炎が届くことは無かつた。

少女の周りに水の盾が出来ていたからだ。

「ふむ。なかなかの龍じゃ。」

少女は自分の身体の一部を眺めながら呟く。

その視線の先には僅かに焦げた服の一部があつた。

「殺せよ。」

先程の攻撃で精神力を使い果たしたのだろう。

床に膝を付いた少年が近づいてくる少女にそう呟く。

「何故じゃ？逃げる力くらいは残つておるだろう？」

「俺はお前を殺しに来た刺客だ。暗殺が失敗しても居場所があるなんて都合のいいことは存在しないんだ。」

「そうか…。」

「そう…。だから一思いに…」

「ならば、私の元で働け。」

「は！？」

わけがわからず驚きの声を発する少年。

それもそのはず、少年は少女を暗殺しようとした張本人なのだ。

「だから、私の護衛として働けと言つておるんじゃ。」

だが、それを構わず、少女は同じ台詞を繰り返す。

「えーと…ミィ暗殺者。ユー標的。オーケエ？」

「オ…オケ。」

「じゃあホワイ？」

その言葉に、少女ゆっくり口を開く。

「そうだな。過ぎたる力というのはどこかに歪みをもたらす。お主が所属する組織がその典型であろう。しかし…」

「…。」

僅かな間…。

そして、少女は再び言葉を紡ぎだす。

少年を導く希望の道筋を。

「お主自身がそのように歪んでいるとは終ぞ思えぬ。今のお主は行き場を無くし彷徨っているように見えた。それでは道を踏み外すこともあるじゃろう。」

「…。」

「それに暗殺者と標的？それがどうした。どこでどのように交わるかなんて私らが決められるものではない。人と人の間の縁なんてなんてそんなもんじゃ。」

「…。」

「最初はここに居ってもお主に居場所は無いじゃろう。ならば、作れ。」

命ずる。主は今日より我直属の護衛じゃ。」

静まり返った王宮内で、少女の凜とした声のみが響いた。

あとがき

うーん、やっぱり文章が未熟ですね…

他の作者さんのと比べるとどーも、

もう少し文章上手に書きたい症候群にかかったsakuでした。
ではまた。

カツンカツン

暗い地下の牢獄に足音が響いた。

「またお前か。」

牢獄の一室に入れられ、手錠を掛けられた少年は目の前の少女を見上げた。

少年が牢獄に入れられて10日、極刑にならず監獄されるに留まったのは、少女の進言というか強い要望によるものに他ならない。

「いい加減、意地を張るのは止めたらどうじゃ？」

「…嫌だね。」

「まあ、良からう。出る。」

少女は呆れたように笑い、懷から取り出した鍵で牢屋の扉を開けた。

「今日から私の護衛として働いてもらう。」

「だから、嫌だと言って……」

「しかし、先日の上の連中は反対しておる。よって契約の印を結ぶこととなった。」

「おいっ、聞けって。」

清々しいまでの無視。

これが学校だったらPTAとか出てくるんだかな。と少年は思う。しかし、最後まで話を聞こうとしない少女は呪文の詠唱を始めた。

「ちよっ、待てよ。」

某イケメンジャニーズのように直も少年は抗議するが、少女は気にも留めない。

その代わりに冷静にこう言い放った。

「動くな、力を抜け。死ぬぞ。」

「あ!？」

「コンストラクト!!」

少女が指二つで少年の胸に触れる。

「ぐあああー」

すると、身を焼く痛みが少年の身体を引き裂き、それと引き換えに複雑な紋章がそこに浮かび上がる。

そして、少年は意識を手放した。

■ ■ ■

少しの時間が流れ、目を覚ました少年の目に入っただのは高い天井。ゆっくりと起き上がり、周りを見渡すとそこはどうかやら小さな客室であった。

「気が付いたか？」

少年の様子に気づき、少女が近くに腰掛ける。

「おかげさまでよく眠れましたよ。」

「それは良かった。」

「……」

少年の嫌味たつぷりの返答。

反対に、少女の笑顔に刺々しい感じは無い。

どうやら、この少女にはどんな状況に動じないというか、揺るがない心というか……

まあ、多少KY（空気読めない）などところがあるのかもしれない。

「んで、これは何だ??」

嫌味を通じないと察知した少年は直ぐに話題を変える。

こちらは、無駄なことではないタイプの人間のようだ。

「ん、契約の印と言ったじゃろ。」

「それが何か聞いてんだ。」

「聞きたいのか？」

「そう言ってる。」

ふーん、そうか聞きたいのか。とバカみたいに勿体付ける少女。

「ならば、ルナ様お願いします。と言え。」

「言つか!?!」

鋭いツツコミ。

大抵のボケなら喜ぶテンポとタイミングであつたが、自覚の無い少女ではそうはいかない。

「ふむ、まあ良い、教えよう。これは、飼い犬がご主人様に逆らつた時に使う物でな。ほれ。」

案の定、しかめつ面で、短く呪文を詠唱した。

「ぐああああー」

おお、見事なデジャビュ。

「はあ…はあ。」

「こつこつ効果じゃ。」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「何一つ言つこともできんのか？この犬ところ。」

「…ぐつ」

言い返すことができぬほどの大敗。

そうして、少年は少女に屈した。

「さて、冗談はこの位にして任務の話じゃが、我々が以前からマークしていた闇売人がこの国に潜入したという情報が入った。という訳で、今回お主には陽動役兼私の護衛として動いてもらう。」

「…」

少女にとっては冗談でも、少年にとっては冗談ではない。

しかし、少女は淡々とした口調でさらにきついことを告げた。

「この任務の結果如何でお主の今後の処遇が決まる。それを頭に入れて置け。」

あとがき

前回の話で少年が臣下に下るのは早すぎるかな…と感じたため今回の話に至ります。

たぶん3話ほど、

どーするかすごい悩んだんですけどね…

それにしても最近寒いですね

風呂上りとか、特に。。

皆さんも風邪引かないように気をつけてください。
ではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1419d/>

この月の向こう

2011年1月16日09時55分発行